

一、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

想定外に向き合う知力

これから自分が生きていくとき、何が起ころのかは、現在の時点でまだ誰にもわからない。東日本大震災のとき、原発事故が起こった。そこでは「想定外」という言葉が頻繁に用いられた。^a

私たちのこれからの時間、将来の人生に起ころことは、すべて想定外のことなのである。想定外の事態を、なんとか自分だけの力で乗り越えていかなければならない。生きるとはそういうことである。^①

運動をするにはそれなりの基礎体力をつけなければならないのと同様に、これから何が起ころかわからない想定外の問題について自分なりに対処するためには、それなりの体力が要求される。私はそれを「知の体力」と呼んでいる。^②

それは知識の習得である以上に、どう考えればその場を乗り切れるのかという、考え方の訓練なのである。知識を持っていることは、もちろん大切なことであるが、それは弾力的な知識でなくては、実際の応用には役に立たない。単に教科書に書かれている通りに覚えている知識では、自分が現場で出くわした初めての体験にそれを応用するには、まだ硬すぎるのである。

知識を解きほぐし、応用可能なまでに自由に伸び縮みできるようにするためには、その知識が、どのような多くの人々の試行錯誤のもとにもたらされたものなのか、それが作り出されたプロセスを知り、その知がカバーできる外延をなぞり、かつその知によって自分のすでに得ていた知の体系が再構成されることが必要であろう。^③

「自分ならどう考えるか」というときに、それまでに先人たちがどのように考えてきたかを学ぶことは、具体的に何かの役に立てるという勉強以上に重要な意味を持っている。「生命」というものについて、どのような見方が交錯し、次第にその真理に近づいていったかについては、のちに少し詳しくみることにするが、われわれが疑うこともない常識としての知も、それが確立するまでには、さまざまな見方からアプローチする人々によって、たゆまぬ議論と反証が重ねられ、揺れながら、ゆっくり醸成されていったものである。それをつぶさに知ることは、ものの見方の多様性を知ることになる。そのような視点、視角の多様性を自らのものとして持っていることは、想定外の現実への対応として必須のことなのである。^④

本来の勉強というものは、あるいは学問というものは、何かのためにするものではないのだろう。具体的に何かを解決するためにという目的はつきりしたものは学習であり、学問とは学んで問うもの。何かの解決のためのものではないと思いたい。具体的な問題の解決のためにする勉強もあっていいが、具体的な目標を設定しない、もっとはるかに遠い未来に漠然と何かの役に立つ勉強もあり、それが学問というものである。^⑤

私の講義では教科書をつかわないと先に述べた。そのもっとも大きな理由は、「わかっていること」を教えるよりは、「わかっていないこと」を教えることこそが、大学における教育、講義の本来の姿だと考えるからである。「まだわかっていないこと」を学生諸君にシヨウカイし、それがなぜまだわかっていないのかを説明する。その「なぜ」に興味を持ってもらうことこそが、大学教育の本来の姿、学問をすることの第一歩であると思っっているからである。^⑥

教科書は便利でよくできており、必要な知識はほぼすべて漏れなく収録されている。しかし、教科書には唯一、書かれていないことがある。それは「わかっていないこと」である。「わかっていること」は必要十分に網羅されているのが教科書だが、教科書には、唯一、「まだわかっていないこと」は書かれていないのである。当たり前のことである。^⑦

私の専門は理系なので、どうしてもそちらの教科書を中心に考えることになってしまいが、高校までの教科書を注意深く読んでみても、知識の先端にあって、これはまだ明らかでないという部分をわざわざ取り上げて、そのわからない理由や、いくつもの理論があって定説がないなどという部分をクローズアップしている教科書は、たとえあったとしても例外的であろう。多くは、すでに「わかっていること」が整然と述べられて

いるのが教科書である。

すでに「わかっていること」を習得、すなわち学習することも大切であるが、より大切な学びは、すでに「わかっていること」のすぐ横には、まだこんなに「わかっていないこと」があるのだということをも例をもって示すこと、気づいてもらうことではないだろうか。

もちろん「まだわかっていないこと」をわかってももらうためには、2「を知っているということが前提になる。」だから、仕方がないから教科書に書いてある内容も講義するけれど、しばらく我慢して聞いてほしい」と言って、いわゆる講義もしなければならなくなる。しかし、わかっていることをしっかりと理解してもらうことは、わかっていることを知るための前提という位置づけである。何人か一人の学生が、そんなわかっていることばかりの世界に魅力を感じて、研究者への道を歩んでくれればというはかない望みを持ちながら、講義をしているのである。

わかっている事実の山のようなシユウセキを見せつけられたら、誰もその上に自分が何かを築こうなどは到底思えないものだが、「わかっている」と思っていたことのすぐ横に、こんなことさえもまだわかっていないのかと知ることは、それなら自分でも何とかその問題、課題の解決に参加できるかもしれないと思わせる契機になるだろう。受動的な学習から、能動的な学習へのシフトは、まさにそんな「ひよっとしたら、自分でも」と能動的に考えることを外しては起こり得ないのである。

(永田和宏『知の体力』より)

問一 傍線部 a～e のカタカナを漢字に直し、漢字の読みをひらがなで記しなさい。

問二 二重傍線部 A～E の語の品詞を次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- | | | | | | | | | | |
|---|------|---|-----|---|-----|---|----|---|-----|
| ア | 名詞 | イ | 副詞 | ウ | 連体詞 | エ | 動詞 | オ | 形容詞 |
| カ | 形容動詞 | キ | 接続詞 | ク | 感動詞 | ケ | 助詞 | コ | 助動詞 |

問三 傍線部①「そういうこと」とはどういうことか。その説明として適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- | | |
|---|-------------------------------------|
| ア | 現在の時点では生きていくなかで何が起こるのかまだ誰にもわからないこと。 |
| イ | 私たちの人生に起こることは将来の人生もすべて想定外のことだということ。 |
| ウ | 想定外の事態を自分だけの力で乗り越えていかなければならないということ。 |
| エ | 想定外の問題について対処する基礎体力をつけなければならないということ。 |

問四 傍線部②「知の体力」を説明した語句を本文中から六字で抜き出しなさい。

問五 傍線部③「知識」の説明として適当でないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- | | | | | | |
|---|---------|---|------------------------|---|-------------|
| ア | 弾力的な知識 | イ | 単に教科書に書かれている通りに覚えている知識 | ウ | 自分のすでに得ていた知 |
| エ | 常識としての知 | | | | |

問六 傍線部④「試行錯誤」の類義語を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- | | | | | | | | |
|---|------|---|------|---|------|---|------|
| ア | 暗中模索 | イ | 即断即決 | ウ | 優柔不断 | エ | 猪突猛進 |
|---|------|---|------|---|------|---|------|

問七 傍線部⑤「それまでに先人たちがどのように考えてきたかを学ぶことは、具体的に何かの役に立てるという勉強以上に重要な意味を持っている」とあるが、その理由を「それまでに先人がどのように考えてきたかを学ぶことで、」に続く形で、本文中の語句を用いて五〇字以内で答えなさい。

問八 傍線部⑥「本来の勉強というものは、あるいは学問というものは、何かのためにするものではないのだろう」とあるが、筆者が考える「学問」とはどのようなものか。端的に説明している部分を本文中から四〇字以内で抜き出しなさい。

問九 空欄1にはここからの内容の小見出しが入る。小見出しとして適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- | | | | | | |
|---|------------------|---|----------------|---|-----------------|
| ア | 本来の大学教育は受動的な学習 | イ | 教科書はとにかく便利なツール | ウ | 学生みんなを研究者にするために |
| エ | 「わかっていないこと」を教えない | | | | |

問十 傍線部⑦「教科書は便利でよくできており、必要な知識はほぼすべて漏れなく収録されている」とあるが、筆者が考える教科書の学習にかかわる語句を次の中からすべて選び、記号で答えなさい。

- ア たゆまぬ議論と反証 イ 「わかっていること」を習得 ウ わかっている問題の解決
エ 受動的 オ 能動的

問十一 空欄2に当てはまる語句を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア わかっていること イ わかっていること

問十二 傍線部⑧「わかっていることを知るための前提」とはどういうことか。その説明として適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 教科書に書いてある必要な知識を習得できていないということを学生に自覚させるための前提。
イ 学生たちが理解していることとまだ理解できていないこととの区別を明確していくための前提。
ウ 学問には教科書に書かれていないまだ明らかでない部分があることを学生が気づくための前提。
エ 将来の人生は想定外でわからないことばかりの世界だがそこに魅力があると感ずるための前提。

二、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

中学三年生の六月に転校してきた「大野」は、「マサ」からサードのレギュラーを奪ったことで、部員たちと険悪な状況が続いていたが、セカンドのレギュラーの「シラ(少年)」だけは、いつも「大野」を気遣っていた。最後の大会に向けて練習に励む二人であったが、大会の前日に「シラ」はセカンドのレギュラーを「マサ」に奪われてしまう。

次の日、セカンドのレギュラーはマサになっていた。試合まで、たった一日しかない。少しでも慣れるよう、富山先生はマサにつきっきりでGETTーのときの身のこなしや、外野からの返球をカットするときのポジションを教え込んだ。

少年は練習の始まる時間よりだ**いぶ**早**めに**部室に入って、家から持ってきた背番号4のユニフォームをマサのロッカーに置いた。『**こんぎつね**』みたいだな、と思うと、涙が出そうになった。

マサが持ってきた背番号14のユニフォームは、練習のあとで受け取った。マサは「シラのぶんもがんばるけん」と言った。少年は黙って、笑いながらうなずいた。Vサインを返してやろうとしたら、視界の隅のほうで、大野がこっちを見ていることに気づいた。目**が**合うとすぐにうつむいてしまったので、表情までは読み取れなかった。

帰り道は、大野と二人で用水路沿いの道を歩いた。言葉にして誘い合ったのではなく、ばらばらに部室を出て、正門を出たあたりでなんとなく一緒になって、「おう」も「よう」もなく、並んで歩きだしたのだった。

大野は口数が少なかった。少年もほとんどしゃべらない。どうしていいかわからない。からっぽのバッテリーボックスと誰もいないベンチが、ぼんやりと浮かぶだけだった。

いつものダガシ屋を、二人とも黙って通り過ぎた。

最初の交差点にさしかかる。大野はまっすぐ渡った。

二つ目の交差点でも、大野は帰らなかった。

三つ目の交差点——もうええけん、遠回りになるけん、ここで帰れや、と少年は言おうとしたが、「遠回り」と「ここ」と「帰れや」の代わりに言葉を探しているうちに、大野はまた、横断歩道をまっすぐ渡った。

そして、最後の交差点。

大野は横断歩道の手前で立ち止まった。右手で提**げ**ていたスポーツバッグを足元に、落とすように置いた。

「シラ……」

少年も足を止め、大野は右手を胸の高さに持ち上げて、左手で右の拳を包み込んでいた。^③

「俺……ノックのときに突き指しちゃった」

大野はへへッ、と笑う。「嘘じゃない」とつづけて、「さっきから我慢してたんだけど、死ぬほど痛くてさ……」と、今度は顔をしかめた。少年はなににも応えず、大野の手元をぼんやりと見つめる。

「明日の試合、休むよ」

大野がそう言っても、少年は目も口も動かさなかった。

「バチが当たったんだよな、俺、『ウルトラマン』の怪獣だから、最後はやつつけられるんだよ」^④

少年は黙っていた。身じろぎもせず、ただ、黙り込んでいた。

「先生に、明日、言うから」とつづける大野の声は急にか細くなって、「だって……痛くて、たまんないんだよな……」と、さらに弱々しくなった。少年は軽く息を吸い込んで、「がんばれや」と言った。嘘のように言葉がなめらかに出た。ひとりごとのようにしゃべったから、なのかもしれない。

大野は泣きだしそうに顔をゆがめた。

「俺、出ないって、ほんとに。シラをホケツにしてまで試合に出たくないって。俺のせいだからさ、いいんだよ、俺はもともといなかった

奴なんだから。俺がいなくなったって、元に戻っただけだろ？ それでいいし、そっちのほうがいいんだよ、絶対」

「アホなこと言わんでええけん……」^⑤

「信じてくれよ」

「大野、アンダーシャツ、返せや。試合はええけん、シャツ返せ」^{*}

返せの「カ」が、すんなり言えた。声は大きくても、これはせんぶひとりごとなのかもしれない。

「早よ返せや、わしのシャツなんじゃけん」^B

少年は、ほら、と右手を出してうながした。大野はなにか言いたそうに口を開きかけたが、すぐに閉じて、「洗濯してから返すよ」と言い直した。

「そげなことせんでええけん、早う返してくれ。いまあるんじゃろ、早う返せや」

ほら、ほら、と右手を大野の胸の前に突き出した。言葉はすらすら出てくる。でも、耳に聞こえてくる声は、自分の声ではないみたいにひらべったく、薄っぺらだった。^⑥

大野はもうなにも言わなかった。スポーツバッグの前にしゃがみ込み、ファスナーを開けて、しわくちゃに丸めたアンダーシャツを出した。膝の上で畳み直そうとするのを、少年は「ええけん」と制して、ひったくるようにシャツを取った。^C

汗で濡れている。スっぱいようなにおいもする。^E

捨てるつもりだった。シャツを用水路に放り込んで、大野にもう一度「がんばれよ」と言ってやって、その代わりに、もう立ち止まらずに交差点をまっすぐ渡ろう、と思っていた。

シャツのおなかのところに、黒い染みがあった。

違う、それはサインペンの文字だった。

Never Give Up—あまり上手くない筆記体で書いてある。

あきらめるな、と書いてある。

「シラ……ごめん、俺、もらったんだと思って、書いてしまった」

大野は「弁償するから」と付け加えて、「ほんと、ごめん、すみません」と頭を下げた。

少年はおなかの文字を包み込むようにシャツを丸めた。

大野は頭を下げてままだだったので、少年が、シャツをスポーツバッグに入れ直した。ネバー、ギブ、アップ、と心の中でつぶやいた。^⑦ネバー、ギブ、アップ、と繰り返して、ファスナーを閉めた。

「もうええけん」と声をかけると、大野はやっと顔を上げた。目が合う前に、少年は背中を向けて歩きだした。振り返らずに、大野に言った。

「がっ、がっ、がっ……」

言葉がつかえてほっとしたなんて、生まれて初めてだったかもしれない。

「がんばるからー」大野は少年の背中に答えた。「ほんと、俺、明日がんばるからー」

少年は歩きながら、前を向いたまま、うなずいた。

でも、ほんとうは、大野は勘違いしていた。少年が言いたかったのは、「がんばれ」ではなかった。

がんばるけんー自分のことを言いたかったのだ。

(重松清『きよ』より)

※ アンダーシャツ……シラが以前、黒いアンダーシャツを試合用に一枚しか持っていない大野を氣遣って、大野にあげたもの。

問一 傍線部 a～e のカタカナを漢字に直し、漢字の読みをひらがなで記しなさい。

問二 波線部 x「だいぶ」・y「ばらばらに」・z「軽く」が修飾している語句をそれぞれの選択肢の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- | | | | |
|---------------------|---------|------------|---------|
| x 「だいぶ」……………ア 早めに | イ 部屋 | ウ 入って | エ 置いた |
| y 「ばらばらに」……………ア 二人で | イ 部屋を | ウ 出て | エ なんとなく |
| z 「軽く」……………ア 息を | イ 吸い込んで | ウ 「がんばれや」と | エ 言った |

問三 二重傍線部 A「身じろぎもせず」・B「うながした」・C「ひったくる」の本文中における意味として適当なものをそれぞれの選択肢の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- | | | | | |
|-------------|-----------|------------|-------------|------------|
| A 「身じろぎもせず」 | ア 気後れもせずに | イ じっと動かないで | ウ 後ずさりもしないで | エ 表情を変えないで |
| B 「うながした」 | ア 早口で言った | イ 繰り返し訴えた | ウ せきたてた | エ 思いを示した |
| C 「ひったくる」 | ア こっそり盗む | イ 強く引きはがす | ウ 大事にもらい受ける | エ 無理に奪い取る |

問四 傍線部①「目が合うとすぐにうつむいてしまったので、表情までは読み取れなかった」とあるが、この時の「大野」の心情を説明したものととして適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- | |
|-------------------------------------|
| ア シラの様子があまりにも体裁が悪くて笑いをこらえきれないでいる。 |
| イ うつむいたシラがその後どのような顔をしているか探ろうとしている。 |
| ウ 皆の目がある手前、シラには無関心であるように振る舞おうとしている。 |
| エ レギュラーを外されたシラに同情し、いたたまれない気持ちでいる。 |

問五 傍線部②「からっぽのバッテリーボックスと誰もいないベンチが、ほんやりと浮かぶだけだった」とはどのような心情を表していると考えられるか。その説明として適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- | |
|------------------------------------|
| ア レギュラーを外されたことを親に怒られることを想像しおびえている。 |
| イ お互いにどのように声をかけたらいいかわからずに困惑している。 |
| ウ レギュラーから外れ、心に穴が空いたような喪失感を覚えている。 |
| エ レギュラーを外され、自分ひとりで帰ることに孤独を感じている。 |

問六 傍線部③「包み込んでいた」の主語を本文中から抜き出して答えなさい。

問七 傍線部④「『ウルトラマン』の怪獣」とは、「大野」が転校生である自分のことを、外からやってきて野球部の平和を乱した存在という意味で言っているが、このような修辭法を何というか。適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 擬人法 イ 直喩法 ウ 隱喩法 エ 擬態法 オ 倒置法

問八 傍線部⑤「アホなこと言わんでええけん……」とあるが、「アホなこと」として適当でないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 野球ではよくある突き指くらいで試合を休むと言ったこと

イ シラがレギュラーではないのは自分のせいだと言ったこと

ウ 転校生がレギュラーを奪いバチが当たったと言ったこと

エ 自分よりもシラが試合に出るほうがよいと言ったこと

問九 傍線部⑥「耳に聞こえてくる声は、自分の声ではないみたいにひらべったく、薄っぺらだった」とあるが、その理由の説明として適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 大野が試合に出られないようにするために、少年があらかじめ用意していた言葉だったから。

イ 大野は捨て置き、少年自身のことしか考えずに発してしまった言葉が気に入らなかったから。

ウ 大野のことを気遣いながらも強がって発した言葉に、少年の本心では納得できずにいたから。

エ 大野を思いやる優しい言葉をかけてやることができず、少年は恥ずかしいと感じたから。

問十 傍線部⑦「ネバー、ギブ、アッブ、と繰り返して、ファスナーを閉めた」とあるが、この時の「少年」の心情の変化を四〇字以内で説明しなさい。

問十一 本文を読んだ生徒四人が発言している。本文の内容を正しく理解していないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 大野は自分も試合に出たいという気持ちを押し殺して、嘘をついてまで少年を最後の試合に出させようとしたのは優しいね。

イ シラは相手を思いやる気持ちを持っている子だけど、大野がシャツに字を書いたからといって捨てようとするのはひどいよ。

ウ シラはレギュラーを外れ落ち込んでいるのに、マサにも大野にも相手を気遣うような対応をしようとして仲間思いだったね。

エ 大野はシラの言おうとした言葉を勘違いしたけれど、最終的に大野もシラも最後の試合に向けて前向きになれてよかったな。

三、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

もろ人会議する時、「この事^Aいかが思ひ給ふや。」ととへば、上をはばかり、かたへを見あはせ、とやくするうちに、「我はかくこそおもひ侍るなれ。」とかしらだちたる人言ひ出せば、おほかたは「仰せさる事なり。」とのみいひて、しりぞくものなり。知恵ある人も、ふと聞きては、「さ^aしておもひよりも侍らず。」といふべきほかやあるべき。これは会議に似たれど、その実は会議にあらず。もろこし^Bを学びて、めいめいそのおもひよりをかきつけてたてまつるやうにありたきことなり。^b

(雨森芳洲『たはれ草』より)

問一 二重傍線部 a 「いふべき」・ b 「たてまつるやうに」を現代仮名遣いに直しなさい。

問二 傍線部 A 「いかが思ひ給ふや」・ B 「もろこし」の意味を次からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

A いかが思ひ給ふや

ア なぜ思いなさるだろうか、いや思いなさる必要がない

イ 悪く思われるだろうか

ウ 一大事に思いなさるだろうか、いや思いなさる必要はない

エ どのように思いなさるだろうか

B もろこし

ア いろいろなこと

イ 中国

ウ 礼節

エ 外堀を埋めること

問三 本文の内容について、生徒たちが意見を述べ合っている。本文の内容を正しく理解していないものを二つ選び、記号で答えなさい。

ア 会議の時、先生や先輩に遠慮することはあるよね。

イ 出席者の中には周りの空気を気にしない人はいつの時代でもいるものだよね。

ウ 意見を言った人に大体の人たちは賛成しがちだよ。

エ 賢い人は、正しくないと思ったことには反対せずにはいられないんだね。

問四 筆者はもろこしのやり方に倣って、どうするやり方がよいと考えているのか。次の□に該当する形で十字以内で答えなさい。

もろこしのやり方に倣ってめいめい□提出するやり方。

問五 この出典の成立は江戸時代であるが、次の中から江戸時代に成立したものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 徒然草

イ 奥の細道

ウ 太平記

エ 竹取物語

オ 万葉集